

僕は後悔していない

本堂の方、そして、その裏の垣根を隔てて、大きな墓石が幾つもある庭の一部が見えた。

彼女が、コップにジュースを入れて、お盆に一つ乗せて持ってきた。

彼女が僕をうながし、椅子に座った。

僕がキョロキョロ家中を見渡す。僕は無口で、何も言わない。

彼女から言葉が出た。

「今、誰もいいひんし、心配せんどいて。」

僕はうなづいたが、言葉が出ない。

ぐいっと喉が乾いていて一気に飲んだ。

別に喋ることもない。

僕は彼女に会って、それだけで満足だった。ほっとした。

庭の方を眺めた。

「ごめんね、遠いところを。」

遠かったでしょ。

行こかと思たんやけど、

友達が、知らん人と付き合わん方がええ、と言わはるんで。

家からも遠いし。」